

中世初期における経塚出土短刀の分類と変遷

— 関東地方とその周辺の資料を対象にして —

おお たい ひろ たか
大 竹 弘 高

中世初期における経塚出土短刀の分類と変遷

— 関東地方とその周辺の資料を対象にして —

大 竹 弘 高

- | | |
|--------------|------------------------|
| 1 はじめに | 4 12～13世紀前半における出土短刀の変遷 |
| 2 研究略史 | 5 小結 |
| 3 出土短刀の細別と分類 | 6 今後の課題と展望 |

これまであまり研究されてこなかった中世の短刀に関して、関東地方および周辺諸県で見つかっている経塚の資料を主に扱い、分類と編年を行うものである。まず、分類に関しては、長さ、鋒の形状、反りの有無で大分類し、区の形状、棟の形状によって小分類を行った。そして、それぞれの系譜を組立て、各遺跡の年代観を元にそれぞれの分類の年代幅を考察した。その結果、12世紀前半から13世紀初頭の時期の中で、12世紀後半に撫区から角区のものへ、また刀身に反りの加わるものが出現すること、12世紀末から13世紀初頭にかけて平棟から庵棟、丸棟のものへと変化することが想定できた。最後に関東地方および周辺諸県以外の経塚出土資料の検討による地域差の問題、設定した分類の祖型と後続形態の問題などを挙げ、今後の課題とした。

1 はじめに

中世の武器、特に刀剣は主に伝世品を資料とした美術工芸史の分野や、有職故実の分野で研究が進められてきた。その分野の中で、太刀に関しては平安時代の作例が知られるが、短刀¹⁾に関しては主に鎌倉時代以降の作例が主体であり、平安時代の短刀に関しては判然としない部分がある。一方、考古資料では、経塚で太刀、短刀、刀子、鉄鏃といった利器類を多く供出することが知られ、利器類の研究においては有効な資料と考えられる。また、経筒や外容器には紀年銘が入る場合があり、その他にも外容器に用いられる陶器などの出土遺物などから、年代の検討には適した資料と考えられる。そこで、本稿では関東地方と周辺諸県の経塚で出土した短刀を集成し、美術工芸の分野では検討の難しい平安時代から鎌倉時代の短刀について、資料の分類と変遷を考察していくものである。

2 研究略史

経塚に関する記録は古くは江戸時代に確認されており、明治時代も各地で偶然発見された経塚の調査報告が多く発表されている。昭和以降では発掘件数の増加によって調査報告例も増え、遺構や遺物の研究も進展していった²⁾。ここでは、各遺物の研究が進展する中で、経塚で出土した武器類に関してはどのような研究が進められてきたのか、その研究略史をまとめて課題を明確にしていきたい。

まず、明治時代以降では石田茂作氏は『経塚』の中で、経塚出土の武器類について、刀子³⁾・太刀・鉾・鏃・その他と分類して、若干の考察を行っている。刀子に関して、1 刀身は直刀式で反りがなく、2 刀身の幅は比較的広い、3 刀身の鋒が後世のに比して鋭い、4 刀身の断面を見るに刀背が厚い、5 刀身の長さは茎の長さの三倍半から四倍のものが多い、6 茎の断面は三角形に近い、と形状の特徴に関して述べている。また、武器類を理納する意味についても述べており、『華厳縁起』で元曉法師が金剛三昧経を持ち帰

る時に、船首に大刀身を飾って海上を渡したとの記述があることを例に挙げた。そして、『華嚴縁起』が鎌倉時代の作とされるため、この時代には経を鬼魔の難から除かれるために刀身を用いる信仰があったと想像されるとしており、経塚で出土する利器は魔除けのためと考えるのが自然であろうと指摘している。

また、末永雅雄氏は花背経塚（京都府）、大屋経塚（福島県）等で出土した腰刀の類例を挙げ、その外装の特徴から「黒漆刻鞘腰刀」と称している。その特徴としては、鞘口に半月状の袢り込みを設け、柄の端部がそれに嵌入して鏝の要をなす、いわゆる呑口式の外装であり、太刀、刀の外装とは異なると述べている。また、小柄、筭の差し込む副室がないことと、栗形、返角の装置も認められないことを指摘している。そして、花背経塚出土の短刀の復元を行っており、鞘の刻みが帯に指した時の脱落防止の役割を果たしている可能性も指摘している。このような質素な外装の腰刀は実用のためのものであり、経塚という宗教的性格の強い遺構で出土した遺物であるが、実用武器としての検証も必要であると指摘している¹⁶⁾。

井口善晴氏は奈良国立博物館に所蔵されている出土不明の経筒と折り曲げられた太刀の年代的位置付けを行うため、同じような折り曲げられた太刀の出土した経塚の資料を集成し、このような類例は瀬戸内地域の資料に多い点を考察している¹⁷⁾。

この他にも各報告書において、埋納状況や武器を埋納する意味について若干の考察が加えられているものもある¹⁸⁾が、経塚で出土する武器類に関する研究は少なく、短刀そのものの研究も、石田茂作氏、末永雅雄氏の論考が挙げられるのみである。これは小型の鉄製品であるため、朽ち果てて全形を捉えられない場合が多いこと、経容器として用いられる陶器類に比べ形態的特徴が捉えづらいことなどが挙げられる。

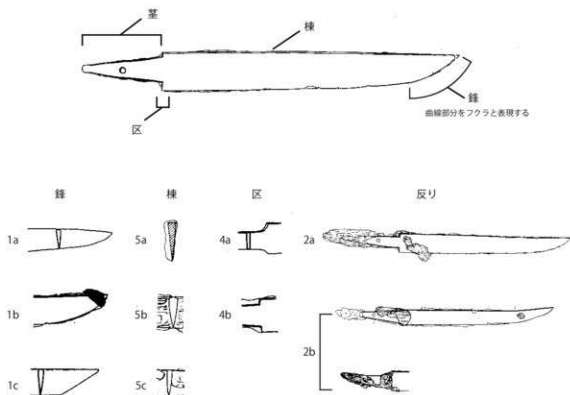
3 出土短刀の細別と分類

表3、4で示すように、関東地方および周辺の福島県、新潟県、静岡県、長野県、山梨県においては断片や細片を含めると78遺跡で太刀、短刀、刀剣の一部が確認されている。本稿ではこの中でも、表3で示した松野千光寺経塚（福島県）、上ノ原経塚（福島県）、米山寺経塚（福島県）、永福寺跡内経塚（神奈川県）¹⁹⁾、堂ヶ谷経塚（静岡県）、横峯経塚（新潟県）、小栗山不動院裏山経塚（新潟県）を対象とする。これらの遺跡は、調査主体、出土状況が明らかな一次資料であることと短刀の残存状態が良好で、全形が推定できるものであることを基準として選定した。

まず、以上の資料を基に、短刀の各部位の特徴から分類を行っていきたい。短刀を分類する上での形態的特徴として、長さ、反りの有無と位置、鋒の形状、区の形状、棟の形状が挙げられる。これらを挙げた根拠は、短刀の用途を考慮すると鋒の形状や反りの有無は、切るもしくは突くといった用途に関連すると考えられ、区の形状は短刀の外装に関連する項目と考えられるからである。なお、今回対象とした資料は、全て平造りで目釘穴は1つであったため、刀身の断面形状や目釘の有無や数は細別の対象に加えなかった。

以下によってそれぞれの項目の細別を行う（図1）。

1. 鋒の形状
 - a フクラが枯れるもの
 - b フクラのつくもの
 - c カマス鋒のように角張るもの
2. 反りの位置
 - a 反りのないもの
 - b 反りがつくもの



第1図 短刀の部位の名称および分類項目

3. 短刀の長さ

- a 長寸のもの（全長2.5cm以上）
- b 短寸のもの（全長2.5cm以下）

4. 区の形状

- a 楯区のもの
- b 角区のもの

5. 棟の形状

- a 平棟のもの
- b 庵棟のもの
- c 丸棟のもの

上記の細別項目の中でも、(1) 鋒の形状、(2) 反りの有無、(3) 短刀の長さは武器としての機能に直接関係するものと考えられるため、この2項目で大分類を構成する。

- A類** 反りがなく(2a)、長寸(3a)で、フクラが枯れるもの(1a)がこの一類に分類される。
- B類** 反りがなく(2a)、長寸(3a)で、フクラがつくもの(1b)がこの一類に分類される。
- C類** 反りがなく(2a)、長寸(3a)で、フクラがカマズ鋒のように角張るもの(1c)がこの一類に分類される。
- D類** 反りがなく(2a)、短寸(3b)で、フクラが枯れるもの(1a)がこの一類に分類される。
- E類** 反りがなく(2a)、短寸(3b)で、フクラがつくもの(1b)がこの一類に分類される。
- F類** 反りがつき(2b)、長寸(3a)で、フクラが枯れるもの(1a)がこの一類に分類される。
- G類** 反りがつき(2b)、長寸(3a)で、フクラがつくもの(1b)がこの一類に分類される。

さらに5つの分類の中でも、(4)区の形状、(5)棟の形状によってさらに細分できると考えられるため、以下のように小分類の項目が設定できる。

- a 樞区(4a)、平棟(5a)のもの
- b 角区(4b)、平棟(5a)のもの
- c 角区(4a)、庵棟(5b)のもの
- d 棟側が樞区(4a)で刃側が角区(4b)になり、丸棟(5c)のもの

A類(図2、表1)

A類では樞区で平棟のもの(Aa)、角区で平棟のもの(Ab)の2類が確認できる。

B類(図2、表1)

B類では樞区、平棟のもの(Ba)、角区、平棟のもの(Bb)(4)区の形状(8)、の2類が確認できる。

C類(図2、表1)

C類では樞区、平棟のもの(Ca)、角区、平棟のもの(Cb)の2類が確認できる。

D類(図3、表1)

D類では角区、平棟のもの(Db)(8)、棟側が樞区で刃側が角区になり、丸棟のもの(Dd)の4類が確認できる。

E類(図3、表1)

E類では樞区、平棟のもの(Ea)、角区、平棟のもの(Eb)(8)、角区、庵棟のもの(Ec)の3類が確認できる。

F類(図3、表1)

F類では角区、平棟のもの(Fb)(8)の1類が確認できる。

G類(図3、表1)

G類では樞区、平棟のもの(Ga)の1類が確認できる。

4 12～13世紀前半における出土短刀の変遷

4-1 出土短刀の系譜的位置付け

では、次に各分類がどのように系譜的に位置づけられるのか考えていきたい。A～G類は各分類の中でそれぞれ系列が並れるものと考えられる。

A類 フクラが枯れることによって根元から鋒に向かって窄まって行くような形態のもので、太刀にも類例のあるカマス鋒やフクラのつく鋒の影響の中で成立した形態と想定できる。この分類の中でもAaとAbは区の形状がそれぞれ樞区と角区である点で異なるが、それ以外は同じ形状であることから直接的な系譜が辿れるものと考えられる。Aaのような区の形状は、鎌倉時代以降の短刀では一般的ではないことから、AaよりAbが組列としては後に想定したい。

B類 BaとBbは、AaとAbと同じように区の形状が樞区から角区へと変化したものと考えられるため、直接的な系譜が辿れるものと考えられる。この樞区から角区への変化はAaとAbの組列の変化と同じであるため、BaとBbの組列はAaとAbと並行関係にあるものと想定したい。

C類 Ca類は鋒の形状が他の短刀とは異なるため、A類、B類との関係性は薄いものと考えられる。この鋒の形状は奈良時代の切刃造りの大刀や、平安時代のカマス鋒の太刀⁽⁹⁾などと似るため、それらの影響も想定できる。CbはCaよりやや鋒が丸みを帯び、角区になる点で異なる。Ca類と系譜の繋がるものと考えられ、Bbの影響を受けて成立したものと考えられる。

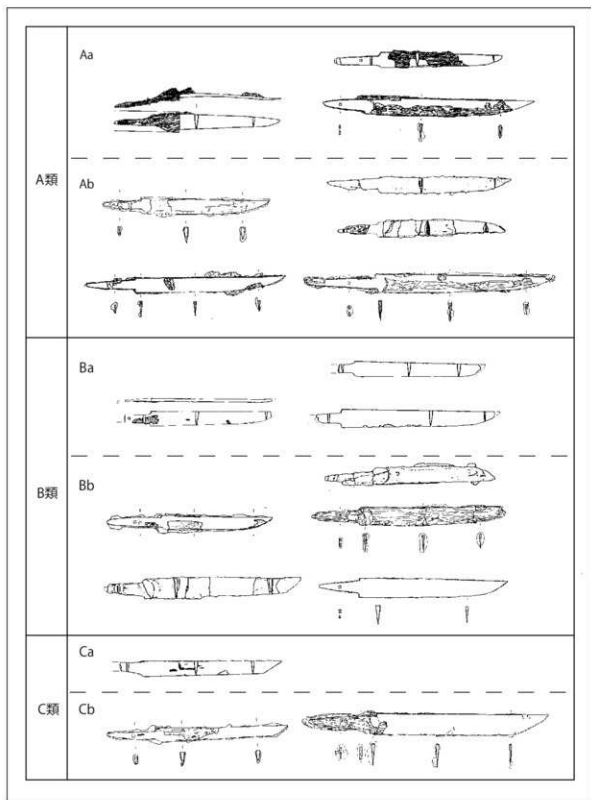


図2 短刀の分類(1)

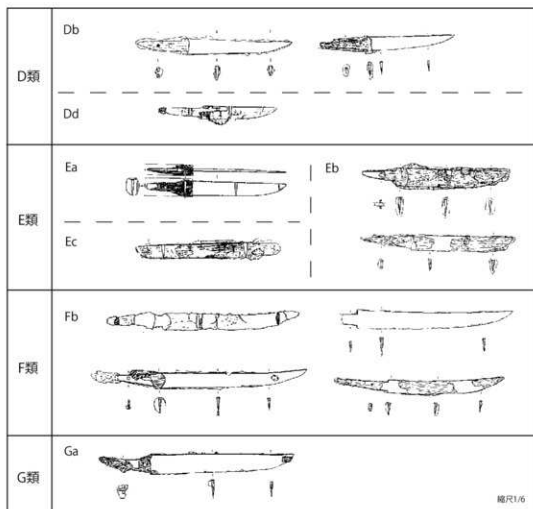


図3 短刀の分類(2)

表1 短刀の分類

	A		B		C		D		E			F	G
	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca	Cb	Db	Dd	Ea	Eb	Ec	Fb	Ga
鋒	1 a	○	○				○	○				○	
	1 b		○	○					○	○	○		○
	1 c				○	○							
反り	2 a	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	2 b											○	○
長さ	3 a	○	○	○	○	○						○	○
	3 b						○	○	○	○	○		
面	4 a	○		○		○		○	○				○
	4 b		○		○		○	○		○	○	○	○
棟	5 a	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○
	5 b										○		
	5 c							○					

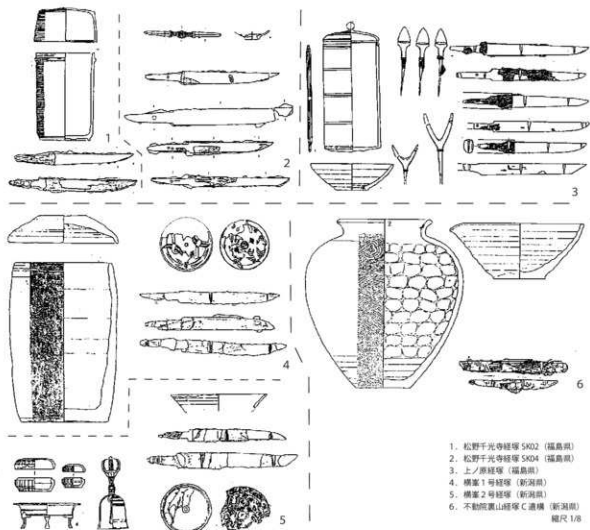


図4 各経塚の供出遺物(1)

D類 D類はA類を小型にした形状であるため、A類と関係の深いものと考えられる。この中でもD bはA bを小型化した形状であるため、A bの形態から派生したものと考えられる。D dはD bの平棟の形状が庵棟に変化したものと考えられることから、D bから系譜が辿れるものと考えられる。

E類 E類はB類を小型にした形状であるため、B類と関係の深い形態と考えられる。E aはB aを小型にした形状であるため関係性の深い形態と考えられる。次にE bはB bを小型化した形状であるため、B bと関係のあるものと考えられるが、E aの区の形状が変化したものと想定できるため、組別としてはE aから派生したものであろう。またこの変化はB aとB bと同じであるため、E aとE bもB aとB bと並行関係にあるものと考えられる。最後にE cに関しては、E bの平棟の形状から庵棟の形状に変化したものと考えられるため、直接的な系譜が辿れるものと考えられる。

F類 F bはA bに反りが加わった形状を呈しているため、A bから派生した形態と想定できる。

G類 GはB aの基に反りが加わった形状を呈しているため、B aから派生した形態と想定できる。

4-2 出土短刀の年代的位置付け

A aは上ノ原経塚(福島県)、堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図4-3、図5-2)。

上ノ原経塚では遺構内で赤焼土器が1点、白磁が1点、鉄鏝、銅製の経容器1点との中から紙本経が出土している。ロクロ成形後に調整を施さず、底部は糸切り痕を残す赤焼き土器とされる。発掘調査報告書によると県内各遺跡で出土した土器の法量比較によって、口径に比べ器高が高くなることと、12・13世紀代の土器と比較して薄いという点から12世紀前半と位置づけている。その他にも発掘調査報告書では経容器内に埋納されていた紙本経の天地幅の特徴やベータ線計測法による放射性炭素年代測定から12世紀前半と位置づけている¹⁰⁰⁾。

一方、堂ヶ谷1号経塚では、掘られた土坑に伴う溝で山茶碗の小碗が出土している。これらは口縁部のやや外反する形状と高台の高さが前型式のものよりやや低い点から、松井一明氏の編年によるところの山茶碗Ⅰ-2期に位置づけられ、12世紀中葉とされる。また1号経塚では他にも山茶碗の小碗、東遠江産の甕、白磁碗・皿、和鏡、鉄鏝などが出土した。これらの遺物は12世紀中頃～12世紀後半に位置づけられる。このように堂ヶ谷1号経塚はやや年代幅のある遺物が出土しているが、経塚造営の年代は下限の12世紀後半とされている¹⁰¹⁾。

このことからA aは上限を12世紀前半、下限を12世紀後半としておきたい。

A bは松野千光寺経塚SKO2、SKO4（福島県）、横峯1号、2号経塚（新潟県）、堂ヶ谷1号、2号経塚（静岡県）で確認できる（図4-1・2・4・5、図5-2・3）。

松野千光寺経塚SKO2では、土師質土器の底部と銅製経筒が出土し、SKO4では白磁片と独結片が出土した。

これらの遺物から年代を考えるのは難しいが、SKO2の銅製経筒は他の類例との比較によって、関東地方の類例で多く見られるものであるから平安時代後期に位置付けられるとされる。またSKO4で出土した独結片は鬼目や連弁の表現や銜部の長さから同じように平安時代後期に位置付けられる。また、昭和初期の調査で同じ遺跡内で「大治五年」銘の石櫃が出土しており、この遺物に近い年代とすれば、これらの遺物の年代を12世紀中頃から後半に位置付けられる¹⁰²⁾。

横峯1号経塚では和鏡2面と珠洲焼の経容器である身と蓋が出土した。和鏡には墨書が施されており、「仁口安カロ口」と読めるとされる¹⁰³⁾。また吉岡康暢氏分類・編年によると、身に関しては素縁（B類）で、筒型（Ⅱ類）に分類でき、経筒類もⅠ期を中心に定数製作されているとしている¹⁰⁴⁾。以上の点から、和鏡裏面の墨書を「仁安」と積極的に解釈するならば、12世紀第3四半期に想定されるが、経容器の年代が12世紀後半にあたるため、やや年代幅をもたせて、12世紀後半としておきたい。

横峯2号経塚では年代を推定するのが難しいが、遺物としては、白磁皿片1点、青白磁合子2点、和鏡2面、火舎1点、五鈴鉾が1点出土しており、これらの遺物の特徴とから平安時代後期のものと考えられ、この2号経塚の周溝が1号経塚の周溝の後に構築されていることから12世紀末～13世紀初頭という年代が与えられている¹⁰⁵⁾。

堂ヶ谷2号経塚では床面付近で青白磁皿が出土しており、その他に山茶碗、白磁碗、青磁碗が出土した。先述の1号経塚と同様に、貿易陶磁に関しては横田・森田氏の編年案に、山茶碗に関しては松井氏の編年案に従う。さらに1号経塚に近い年代の経塚と考えられることから12世紀後半にという年代が与えられている¹⁰⁶⁾。

このことからA bは上限を12世紀前半、下限を12世紀後半としておきたい。

B aは上ノ原経塚（福島県）で確認できる（図4-3）。そのため、先述の年代観の通り12世紀前半頃に位置づけられる。

B bは松野千光寺経塚（福島県）、上ノ原経塚（福島県）、横峯1号、2号経塚（新潟県）、永福寺跡内経塚（神

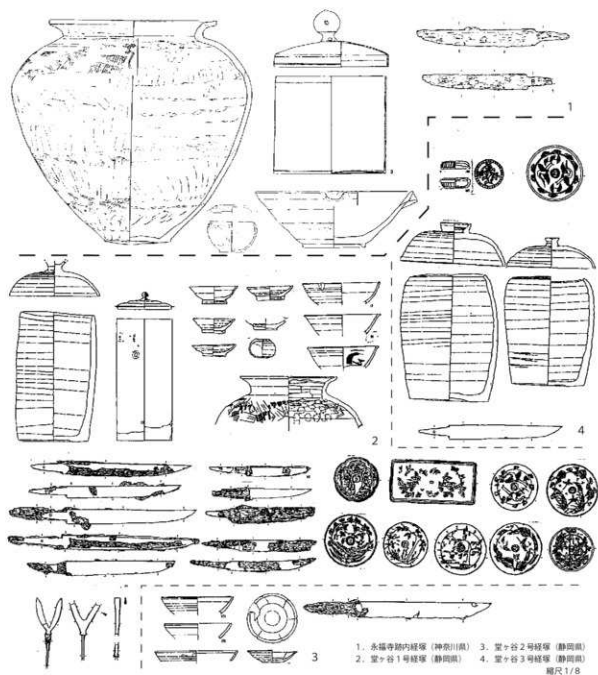


図5 各経塚の供出遺物(2)

表2 短刀の年代

	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca	Cb	Db	Dd	Ea	Eb	Ec	Fb	Ga
12世紀前半	○	○	○		△				○				
12世紀後半		◎	△	◎		△	○			○		△	○
13世紀前半								△			△		

奈川県)、堂ヶ谷1～3号経塚(静岡県)で確認できる(図4-1～5、図5-1～4)。

堂ヶ谷3号経塚は陶製経容器2個体、青白磁合子1点、和鏡1点が出土した。久保氏による和鏡の年代観、及び1、2号経塚と近い時期の遺構と考えられることから12世紀後半に位置付けられる⁽¹⁷⁾。

永福寺跡内経塚では瀧美窯産の甕と片口鉢、白磁の小壺、が出土した。瀧美窯産の甕と片口鉢は器形や調整の特徴から、中野晴久氏の編年によって、甕は3型式に、片口鉢は2型式ないし3型式にそれぞれ位置付けられる註18。このことから12世紀第4四半期(1190～)に位置付けられる。

先述の年代観に従えば、やや年代幅があるが、上限を12世紀前半、下限を12世紀末としておきたい。

C aは上ノ原経塚(福島県)で確認できる(図4-3)。先述の年代観の通り12世紀前半の頃に位置付けられる。

C bは松野千光寺経塚SKO4(福島県)、堂ヶ谷2号経塚(静岡県)で確認できる(図4-2、図5-3)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

D bは堂ヶ谷1号、2号経塚(静岡県)で確認できる(図5-2・3)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

D dは小栗山不動院裏山C遺構(新潟県)で確認できる(図4-6)。小栗山不動院裏山経塚では経容器に珠洲焼の壺と片口鉢が使用されており、壺は体部の肩が強く張り、頸部は弧状に鋭く外反し、口縁は方頭の形態である。この特徴から吉岡氏の種類と編年によるところのT種b3類で、II2期に位置づけられるであろう。片口鉢に関しては、底部からわずかに膨らみを持って外反し、底部から口縁へ徐々に薄くなる特徴からに相当し、同じくII2期に位置づけられる。吉岡氏による歴年代資料の検討から、II2期は13世紀第2四半期に位置づけていることから、D dの下限をこの年代に位置づけたい⁽¹⁸⁾。

E aは上ノ原経塚(福島県)で確認できる(図4-3)。先述の年代観の通り12世紀前半の頃に位置付けられる。

E bは堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図5-2)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

E cは小栗山不動院裏山C遺構(新潟県)で確認できる(図4-6)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

F bは横峯2号経塚(新潟県)、堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図4-5、図5-2)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

G bは堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図5-2)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

4-3 各分類の変遷とその意義

(1) 各分類の変遷

では、上記の年代観に沿って、各分類がどのくらいの年代幅が想定できるのか考えていきたい(図6)。

まず、A類に関してはA aが12世紀前半から後半にかけて確認されているため、12世紀代を通して存続した形態であると考えられる。A bはA aの次に系譜として想定しているが、12世紀後半以降の資料が主体であるため、短い時期差の中で成立した形態と考えられる。

次に、B類に関してはB aがA aと同じように12世紀前半から後半にかけて確認されているため、12世紀代を通して存続した形態であると考えられる。B bはB aの次に系譜として想定しているが、12世紀後半以降の資料が主体であるため、A bと同じように短い時期差の中で成立した形態と考えられる。

C類に関しては、C aが12世紀前半に位置づけられ、C bが12世紀後半に位置づけられる。そのため、

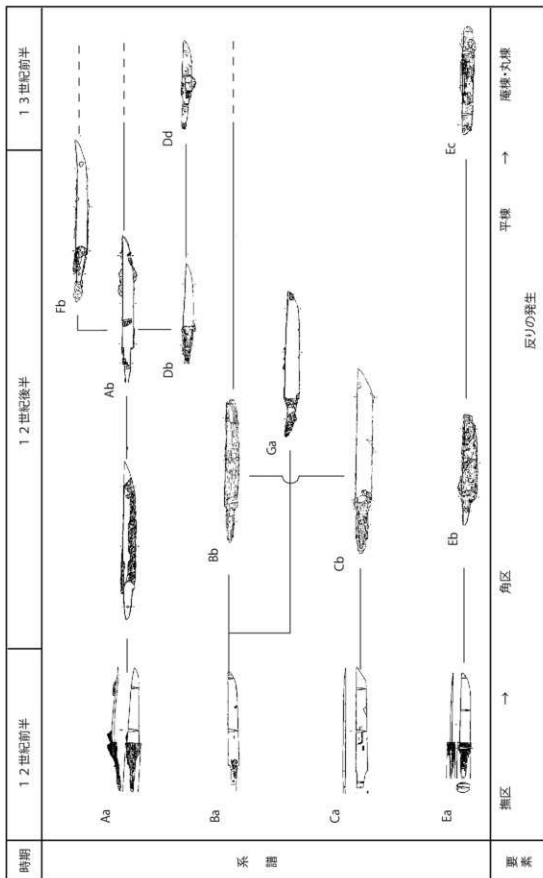
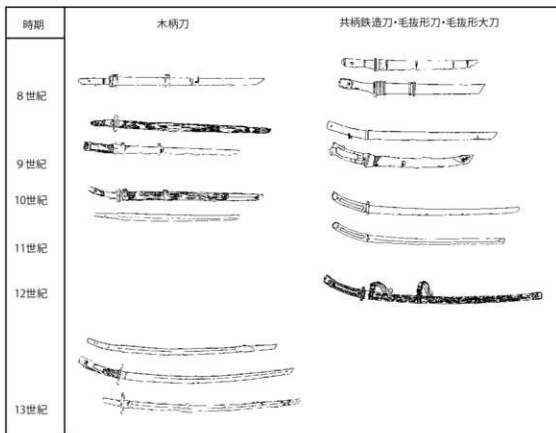


図 6 短刀の変遷



◎津野仁「大刀・太刀の編年」(2011)の図48, 55を一部改変

図7 木柄刀と方頭共鉄柄刀・毛抜形刀・毛抜形太刀の編年

12世紀代を通じてカマス鋒の形態が存在すると考えられるが、C aとC bでは鋒の形状が丸みを帯びていっているのでA類ないしB類に影響を受けていっている可能性も想定できる。

D類に関しては、D bが12世紀後半の資料が主体であるため、並行関係にあると想定されるA bと同じように12世紀後半に成立した形態と想定される。D dは12世紀末～13世紀初頭である。D bから系譜の連なるものと考えられるため、12世紀末に成立した形態と想定できる。

E類に関しては、E aが12世紀前半の資料が主体で、系譜的に連なるE bは12世紀後半の資料が主体である。A bやB bとは異なり、より段階で撫区の形態のものは衰退する可能性がある。E cは12世紀末～13世紀初頭で、B bから系譜の連なるものと考えられることから、A fと同じように12世紀末頃に成立した形態と考えられる。

最後にF類とG類に関しては、F b、G a共に12世紀後半に位置づけられる。A b、B aに反りが加わった形態であるため、それらよりも12世紀後半の中でもやや遅れて発生する形態である可能性が想定できる。これらの変遷の特徴は、12世紀後半に撫区から角区へと変化していること、同時期に反りの加わるもの発生していくことと、12世紀末に麻棟・丸棟が発生していくことが挙げられる。

(2) 太刀の編年との比較

この短刀の変化はどのように位置付けられるのか、研究の進んだ太刀の編年との比較から若干の考察を行ってみたい。まず、太刀の編年研究の現状について簡単にまとめていく。

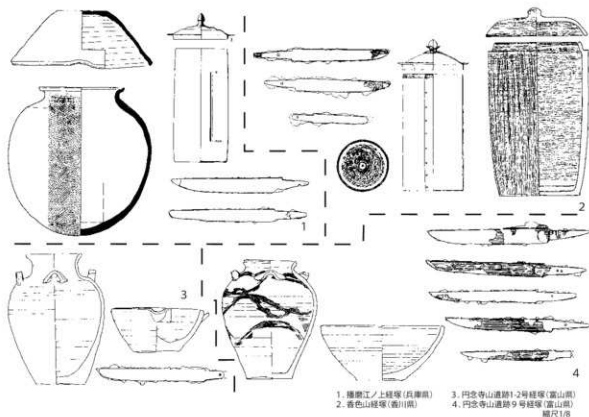


図8 北陸・山陽・四国地方の出土例

石井昌國氏は日本刀の成立について蕨手刀にその源流があると考え、出土した各刀種の観察と刀装具、刀剣の鑄や反りの変化から蕨手刀→毛抜形刀→毛抜形太刀→古代刀という系譜を考えている。その後、蕨手刀→毛抜形刀→毛抜形太刀という系譜と蕨手刀→長柄刀→古太刀という系譜があると考察した。石井氏がこの形式変化の中で重視しているのが反りのつく箇所と反りの変化である。

一方、津野仁氏は、石井氏の古代刀は蕨手刀から派生するという考えは各刀種の形式変化が追えるようになってきていることから、そぐわなくなっているとし、古代から中世の唐様大刀、方頭共鉄柄刀、毛抜形太刀、木柄刀といった各刀種の形状、刀装具の変遷から日本刀の成立について考察している。その中で太刀の反りの発生に関して木柄刀の変遷から、東北南部以南において10世紀代に柄反りが出現し、後半に発達することと、11世紀に腰反りのものが出現すると述べている(20)。さらに刀身の鑄は8～10世紀に少数確認され、日本刀の基本的な形状である鑄造りと庵棟のものは12世紀中葉に確認できると述べている。津野氏の考察も刀身の形状の変化は柄反り、腰反りといった反りの位置が重視されている。

そして、本稿で取り扱った短刀の変遷と比較を行ってみると、反りの発生に関しては12世紀後半に、庵棟の発生に関しては13世紀前半にそれぞれ確認でき、太刀の反りの発生から1～2世紀ほど後出し、庵棟の採用に関しても半世紀ほど後出である点が注目できる(図6・7)。ただし、反りのつくものが確認できるものの、それは少数であり、無反りの形態が多量を占めていることから、無反りの形態が一般的であったことも窺える。一方で、太刀には採用された鑄造りに関しては、太刀の方では8世紀以降少数確認されているが、短刀に関しては12世紀段階でも平造りのものが一般的であったことが窺える。

また、津野氏は『古事記』、『日本書紀』に記載される太刀、刀の使用に関する表現をまとめ、その機能に

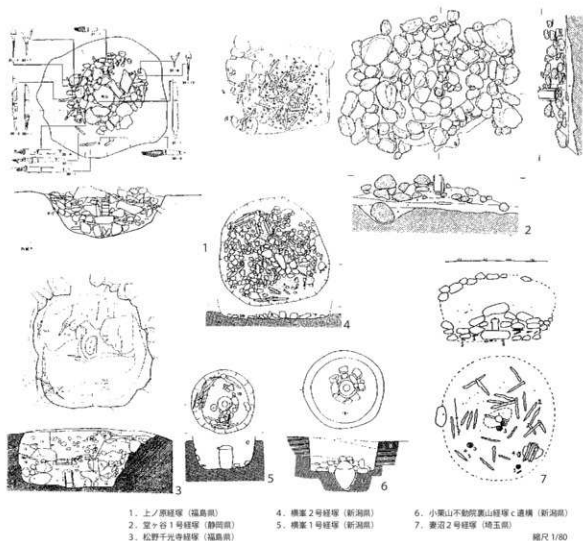


図9 各経塚での短刀の出土状況

ついて考察している。その機能表現の傾向をまとめると、7世紀後半から8世紀前葉の剣・刀は斬る・打つ・刺すから、奈良時代から平安時代前半には太刀に打つと斬るという表現が見られ、平安時代後半にはこれらに加え、打ち斬るという表現が散見されるようになるとしている。このような表現から操刀法の向上によるもので、太刀の柄反り、彎刀化が進んだといえるとしている。一方で、刀子・小刀に関しては刺す機能が主体であり、刀は9世紀後半には刺すといった機能がなくなっていくことから、刀子・小刀の機能を継ぐものとも述べている⁽²¹⁾。このように小刀・刀子・刀に刺すという機能が重視されていたならば、A、B類のような反りのつかない形態や、平造りで薄い形態というのは刺す機能を求められた姿といえる可能性がある。一方で、12世紀後半にはFbやGaにみられるような反りがつくものが現れる。この変化は使用方法が「突く・刺す」以外の「斬る」といった操刀法も太刀と同じように想定できる。現時点ではその機能を明らかにすることはできないが、短刀の様々な形態は太刀とは違う機能が求められていた可能性も想定できる⁽²²⁾。

5 小結

以上のように、経塚出土短刀が12世紀代から13世紀前半を通じて、どのように変遷していくかを検討し

てきた。その結果、12世紀～13世紀初頭を通して、短刀は呑口式の外装で刀身が平造りである点は変化しないが、カマス鋒のものは12世紀後半で見られなくなり、反りのつくものが見られ始めることが挙げられる。また、撫区から角区へと移行していく様相も想定できる。

そして12世紀末には平棟から庵棟、丸棟のものが発生する点が挙げられる。

このような形状の変化の中でも、反りの発生や鋒の形状の変化は、使用方法（戦闘など）の変化に対応したものであると考えられる。経塚に埋納された短刀が、埋納の目的で造られた非実用品ではなく、実用の武器であったのであれば、当時の人々が武器に対して、經典を守る道具という側面でも認識していたということの証明になるであろう。

6 まとめにかえて

経塚出土の短刀に関して、機能面に重点を置いて分類変遷の組み立てを行ったが、前章で述べた経塚に実用の武器を埋納したという証明を行うために、明らかにしなければならない課題をいくつか挙げて、今後の展望を交えてまとめにかえたい。

〈A a、B a、C aの祖型の問題〉¹²³⁾

経塚に埋納された武器が実用のものであるとするならば、平安時代以前の短刀もしくはそれに類する武器との変遷を明らかにしなければならない。具体的には12世紀前半のA a、B a、C aの祖型の問題であるが、前代の短刀類とA a、B a、C aがどのように系譜が辿れるのかもしくは辿れないのかわかりにしなければならない。12世紀前半の注目すべき形態的特徴として、A a、B a、C aが撫区であるという点である。この区の形状は鎌倉時代以降であまり見られないものであり、ここに製作技術上の差がある可能性が想定できる。また奈良・平安時代で東北地方において短い刀の類例が知られる(24)が、それらの刀剣類と系譜的につながるのか、それとも別系統なのかを明らかにしていかなければならない。

〈A f、B e、A b、B bの後続形態の問題〉

上記に関連して後代の変遷も明らかにしなければならない課題であろう。現在の集成できた資料では、13世紀代のA f、B eのみであるが、12世紀後半代で一番多く見られるA bとB bは、後代でも一般的な形状のものと推定される。また、反りのつく形態であるF b、G aの後続形態もどのように変遷していくかを明らかにしていかなければならない。由比ヶ浜集団墓地群ではB b、F bと同様の形態のものが出土しており、14世紀代に位置づけられている¹²⁵⁾。経塚出土の資料ではないが、墓跡や集落跡などの性格の異なる遺構、遺跡で出土する資料で、本稿の分類と類似する形態が確認できる事は後続の問題を考える上で重要である。また、祖型と後続の形態の問題に関連して、本稿で扱った資料と同時代における別性格の遺構での出土資料との形態差も考察すべき課題であろう。

〈外装の問題〉

今回扱った12～13世紀前半の資料では変化が見られなかったため、検討対象としなかったが、外装の変化も短刀の使用という問題を考える上で重要な課題と考えられる。本稿で扱った類例はすべて呑口式の外装であり、室町時代以降に一般的に見られるような合口式のものとは構造が異なり、太刀の外装にも見られない特徴的なものである。また、刀・短刀は帯などに指して「帯びる」ように使用するが、太刀は刃を下にして「佩く」ように使用する¹²⁶⁾。このように着装方法も太刀とは別のものであり、呑口式の外装は短刀の「帯びる」という着装方法と呑口式の外装の発生は太刀との関係を考える上で重要な課題である。短刀の使用及び着装方法前代の系譜を明らかにできれば、この外装の発生に関しても言及できる可能性がある。

〈経塚出土短刀の地域的な差異の問題〉⁽²⁷⁾

本稿では関東地方とその周辺を検討対象としたが、関西や北九州などの、経塚がより盛んに造られた地域の資料の検討は必須である。現在管見の及ぶ所では、円念寺山遺跡（富山県）、鞍馬寺経塚（京都府）、香色山経塚（香川県）、播磨江ノ上経塚（兵庫県）において、今回分類を行ったA b と B b に相当する資料が確認されているため、少なくとも北陸、畿内、山陽地方には同様の形態の短刀が存在していたと考えられる（図8）。これらの資料の中からの本稿での分類以外の形態のものが出てくる可能性もある。またこれらの資料の年代観を検討することによって、本稿の分類の系譜が他地域でも同様の動きなのか、地域的な差があるものなのか検証していかねばならない。

〈短刀の埋納状態の検討と他の遺物とのセット関係の問題〉

本稿では短刀の分類と変遷を目的としたため、経塚内の埋納状況と位置、外容器等に使用される陶磁器や和鎧などの供伴遺物との関係まで考察することができなかった。本稿で扱った資料で短刀の埋納状況に関して見てみれば、①土坑を掘り、経筒の下に刀剣を埋納する（堂ヶ谷1号経塚）、②土坑を掘る、あるいは石室を造り、経筒の周囲に刀剣を埋納する（松野千光寺経塚、永福寺跡内経塚、横峯経塚、小栗山不動院裏山経塚）、③石室を造り、上位に刀剣を埋納する（上ノ原経塚）などが現在のところ確認できる。また、渥美産の陶器、珠洲焼の中世須恵器を伴うもの、白磁などの貿易陶磁器を伴うもの、独結竹などの仏具を伴うもの、これらがセットになるものが見られる。このように先行研究の進んだ陶磁器、仏具、和鎧との埋納状況との対比、もしくは短刀とのセット関係の比較などによって、短刀にどのような性格が与えられていたかを検証していきたい。

以上の5点を課題として提示し、まとめかえたい。今後も折に触れ上記の課題に取り組んでいきたいと考えている。

謝辞

本稿作成にあたり、津野 仁、池田敏宏、内藤 亮、原 京子、永井智教、佐野良平、坂田敏行、中村岳彦、吉原 啓、齊藤達也の各氏に御助言、御協力を賜りました。末尾ながら記して感謝の意を表します。

註

(1)「短刀」という名称は、昭和33年に制定された「銃砲刀剣類所持等取締法」の中で、30cm未満のものを短刀としていることから、今日でもその名称を使用することが多い。近藤好和氏は中世においては史料を用いた検討から、刀の和訓の問題と、刀の機能について考察している（近藤2000）。その中で『和名抄』には小刀を「賀太奈」と読み、「かたな」は短い刀に使われるとされる。また、「短刀」は「たんとう」と読むのは近世以降で、『和名抄』では「能太知」と訓読するとされる。なお、腰刀という語は形態の状態からの呼称であり、早い例例として『兵範記』仁安四年（1169）三月一三日条に記述があるとしている。

このように近藤氏の論考に示されただけでも多くの呼称がある。末永雅雄氏や石井昌國氏は、著作の中で腰刀の用語を用いており、発掘調査報告書等でも短い刀の呼称は、短刀、刀子、腰刀といった表現が見られる。これらの表現はそれぞれに使用方法などを反映した呼称であるが、本稿で扱った資料に関して、外装から明確に使用方法を推定できるものがなかった。そのため、本稿では敢えて短刀という現代で使用される呼称を使用し、広い意味で短い刀剣類として扱っていく。

- (2) 経塚の研究は古く、その蓄積も膨大であるため、ここではその全容を述べるのは困難である。大まかな概要は関秀夫 (1985)『経塚』を参照されたい。特に 1970 年代以降には、奈良国立博物館 (1977)『経塚遺宝』のような全国各地で出土した経塚を集めた研究や、関秀夫 (1989)『経塚 - 関東とその周辺』や、木口勝弘 (1995)『新版 奥州経塚の研究』のような地域的な集成を行った研究も目立つ。本稿では、関秀夫氏の研究に集成を基に資料の検討を行うところが大きい。
- (3) 石田氏は刀子として写真・図を掲載しているが、本稿で扱う短刀と同じものである。
- (4) 末永 1931 論考による。
- (5) 井口 1999 論考による。
- (6) 足立順司氏は数ヶ谷経塚の発掘調査報告書の中で、折り曲げられた太刀、短刀、鉄鏃といった遺物の埋納の目的について考察を加えており、刀を用いた民俗芸能の例を出して、経塚埋納時にも刀を用いた鎮めの儀式を行ったのではないかと推定している (静岡県埋蔵文化財研究所 2007)。また、上ノ原経塚の発掘調査報告書では、出土状況に関する若干の検討を行っており、小刀 6 口が西側のみに並べられ、残り 5 口は 10cm 内外大きさに折られ、大半が石室外で出土しているという状況から石室構築の際に儀式を行ったと考察している。他にも妻沼経塚 (埼玉県)、横峯経塚 (新潟県) の例を挙げ、副納状態の類似性が高い点を挙げている (須賀川市教育委員会 1982)。
- (7) 「永福寺跡内経塚」の名称に関しては、発掘調査報告書 (福田・菊川 2001) では永福寺跡の南側にある丘陵上で発見された「経塚」としか報告されていないため、神奈川県 HP (<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/790016.pdf>) で公開している指定文化財目録 (神奈川県教育委員会生涯学習部文化遺産課 2015) に従う。
- (8) B b、D b、F b は本稿で扱った関東地方以外でも出土例が確認されており、円念寺山遺跡 (富山県) では経塚と考えられる 39 基の遺構の中で、8 基の遺構でこれらの形態の短刀が供出している (高慶他 2005)。この遺跡は経容器に使用された土器によって 12 世紀後半の造営とされているため、本稿で扱った出土例と時期的にも大きな差がない。また、鞍馬寺経塚 (京都府)、播磨江ノ上経塚 (兵庫県)、香色山経塚 (香川県) においても短刀の出土が確認されており、播磨江ノ上経塚では A b、香色山経塚では B b と E b に相当するものがそれぞれ出土している (図 8)。このように北陸、山陽、四国地方の経塚においても同様の形態の短刀が出土していることが確認できているため、他の地域でも武器類が埋納される経塚は多数存在するはずである。本稿での分類が他地域の短刀でも見られるならば、各分類が他地域ではどの時期に存在していたのか、地域的な時期差などを研究していくことが必要となろう。
- (9) 正倉院事務所 1974 文献、佐野美術館 2003 文献による。正倉院の刀剣に関しては大刀 1 ~ 9 号と掲載されている切刃造りの大刀や、11 世紀代とされる伝世品の太刀がカマス鏝の類例として示されている。ただし、カマス鏝で短寸の刀剣類の類例は今回提示した C 類以外はまだ見つかっていないため、太刀の影響があるのか、前代と系譜がどのように繋がるかは今後の課題である。
- (10) (財) いわき市教育文化事業団 1998 文献による。赤埴土器に関しては、宮城県と福島県の 7 遺跡で出土した赤埴土器との法量の比較を行っており、10 世紀代の出土例と比較して法量が大きく、器形も碗形を呈することから、上ノ原経塚の出土例は後出的な様相を示す。また 12・13 世紀の出土例と比較すると、器壁が薄く前出的な様相を示す。そのため、11 世紀頃に位置付けたいが、供出した白磁の例から 12 世紀前半と位置付けている。
- 紙本経に関しては、全国の経塚で出土した 12 遺跡の紙本経を例に挙げ、天地幅の比較と書体の検討を行っている。その結果、天地幅の比較については上ノ原経塚のものが 229mm で、12 世紀第 2 ~ 3 四半期の出土例の数値 (240 ~ 220mm) 内のものであること、その中でも東城寺経塚 (茨城県・222mm)、産土神社裏山経塚 (和歌山県・225mm) と近い数値であることが挙げられる。以上の点から、上ノ原経塚は 12 世紀前半という築造年代が与えられている。
- (11) 久保智康 1999 論考、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 文献、中野晴久 1995 論考、松井一明 1993 論考、お

よび横田賢次郎・森田 勉 1978 論考による。堂ヶ谷1号経塚では、短刀や鏡が埋納されている段階の木炭層、短刀や和鏡の埋納された層では、山茶碗と白磁の碗や合子が出土しており、山茶碗に関してはⅠ-1～2期に含まれるものが多く、白磁の碗に関しては横田・森田氏の分類によるところのV類の碗2点、ⅢないしⅣ類の碗1点が出土している。経筒埋納後の石の被服層で甕が1点出土しており、肩部の張る形態と頸部は短く直線的に立ち上がり口縁部が外反する形態から、瀧美堂・知多窯編年の第2型式に比定される。

和鏡に関しては、発掘調査報告書によると形態的特徴と図像の表現から12世紀前半から12世紀後半ものとされている。久保智康氏は和鏡の図縁の厚みによってⅠ～Ⅲ類と分類している。この中でⅠ類の細縁のものは12世紀第2～3四半期に多く見られると述べており、1号経塚ではこのⅠ類が多く出土している。また、紐の形状の変遷についても整理しており、1号経塚で出土した和鏡で多く見られる辰菊花座紐は12世紀中～後半としている。文様の構成を見てみても、平安時代の和鏡の図柄で見られるような、鳥類を対称もしくは並べて配置する構図、画面を上下2分割し藤や柏を描く構図や、画面の右下から左上へ伸びるように配置した梅樹の構図などは平安時代後期の作例と首肯されるものであろう。

以上の各遺物の年代によって12世紀前半から後半と考えられる遺物があり、やや年代幅があるが、埋納時までの伝世という点も考慮して12世紀後半を埋納の下限と考えられる。

- (12) 福島県喜多方市教育委員会 1999 文献による。
- (13) 小出義治 1997 文献による。
- (14) 吉岡康暢 1994 文献による。
- (15) 安田町教育委員会 1979 文献による。五鈴鉢に関しては比較的薄手に造り、厳しさの中に優雅さがある藤原美術の特色を示しており、火舎に関しては調和のある器形と、質素の内にも温雅な形姿を保ち、特に面取りの台脚は優雅であり、和歌山那智山出土の火舎の類似することから藤原時代の特徴を有する遺物とされる。遺物はいずれも平安末期と考えられ、鎌倉時代と考えられる遺物はないが、鎌倉時代まで時代を下げて考えることは十分にあり得るとされ、平安時代最末期から鎌倉時代初期という年代が与えられる。
- (16) 松井一明 1993 論考、および横田賢次郎・森田 勉 1978 論考による。山茶碗は松井一明氏の編年によるところの山茶碗Ⅰ期に位置付けられ、貿易陶磁は横田賢次郎・森田 勉氏の分類によるところの白磁碗Ⅴ類、白磁碗Ⅵ類、白磁碗Ⅳ類1-b類の輪花皿にそれぞれ位置付けられる。
- (17) 久保智康 1999 文献による。出土した和鏡は中縁のⅡ類に属し、花蕊座紐であることと2羽の鶴が外向する文様から12世紀後半のものと考えられる。1号経塚や2号経塚との関係から同じように12世紀後半の築造年代と想定できる。
- (18) 中野晴久 1995 論考による。なお、甕に関しては体部が直線的になり、口縁部も直線的に外反する形状で、縦長格子文の叩き目が帯状に連続して施される特徴があり、中野氏の編年によるところの3型式に位置付けられる。片口鉢に関しては、直線的に立ち上がる体部、やや薄く調整された口縁部に、3箇所輪花状に施されたキザミによって2型式ないし3型式に位置付けられる。以上の点から下限を12世紀第4四半期としておきたい。
- (19) 吉岡康暢 1994 文献による。
- (20) 津野氏は木柄刀より方頭共鉄柄刀と毛抜形刀の柄反りが先行することを指摘している。方頭共鉄柄刀と毛抜形刀は東北地方に多く分布し、短寸であることから「刀」に分類することができ、使用法もそれと同様と考察している。そしてこの刀種の柄反りの角度は刺すのに効果的であり、太刀の繰刀法とは関連していない事を考察している。このように方頭共鉄柄刀が「刀」に分類できるならば短刀との関連を考えるべきであり、短刀の前代からの系譜を考える上で今後の課題である。
- (21) 佐野美術館 2009 文献による。渡辺妙子氏はこの図録に付される論考の中で、反りと茎の形状の変化から短刀の機能

について述べている。太刀より短寸な刀の例（中尊寺金色堂藏の藤原清衡の棺内にあった吞口式打刀と徳川美術館藏の宗近銘の短刀）を挙げ、平安時代末期に刀にも反りがつくものがあり、太刀同様「切る」という機能を想定している。一方で、同時代に「突く」機能を持った無反りの短刀が出現し、鎌倉時代中期に見られるような伝世品の例に繋がるものとしており。

(22) 津野氏は『平家物語』の記事の刀に関する表現についてもまとめており、その中で腰刀の操刀の表現で「首ヲキル」、「頭ヲカヒ切テ」などの表現が散見される点を指摘する。それと共に太刀とは異なるが、短刀の操刀法にも「切る」という使い方が想定できる可能性があると述べる（津野 2011）。

(23) (9) に同じ

(24) 東日本埋蔵文化財研究会 1997 文献による。この資料集において、7世紀から11世紀古墳や墓跡において短い刀剣の出土例がいくつか散見される。長根Ⅰ遺跡(岩手県)の12号墳と16号墳では全長が30cm前後の直刀が出土しており、これらは8～9世紀に位置付けられる。また湯ノ沢Ⅱ遺跡では土坑墓が40基検出されており、その内のいくつかで30cm前後の刀子が出土したと報告されている。これらは9世紀後葉～10世紀前葉に位置づけられている。また、正倉院の刀剣の中では無任刀44～53号と掲載される直刀は45cm前後の長さであり、注目できる。

これらは短い刀剣類は系譜が直接的に繋がらないと考えるが、中世の短刀を考察する上で考慮すべきであろう。

石井昌國氏は巖手刀子やモヨロ貝塚(北海道)出土の曲手刀子などの、短い刀剣類を類別し、刀子から腰刀への変化について鎌倉時代中期の伝世品とも比較しながら考察している。これらの系譜の整理は必須であろう。

(25) 小山裕之 2005 文献による。この遺跡では遺構に伴って出土はしていないが、Ⅰ層で短刀が2点出土した。このⅠ層で出土した土器の編年によって14世紀代に位置付けられる。

(26) 津野仁 2011 論考、小笠原 1994 論考による。

(27) (8) に同じ

参考文献

- 阿久津 久 1985 「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県立歴史館報』第12号、茨城県立歴史館
- 井口善晴 1999 「折り曲げられた鉄刀を供出する経塚遺物」『鹿園雑集』創刊号、奈良国立博物館
- 石井昌國 1966 『巖手刀—日本刀の初原に関する一考察—』雄山閣
- 石井昌國 佐々木隆 1995 『古代刀と鉄の科学』雄山閣
- 岩手県立博物館 2000 『岩手の経塚』(財)岩手県文化振興事業団
- 小笠原信夫 1994 「日本刀の掬え」『日本の美術1』No. 332 至文堂
- 小山裕之 2005 『由比ヶ浜集団墓地遺跡』玉川文化財研究所
- 栗城謙一・比田井克仁・渡邊克彦・竹花宏之・金持健司・上条朝宏・加藤修 1987 『東京都埋蔵文化財センター調査報告第8集 多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度(第4分冊)』(財)東京都埋蔵文化財センター
- 久保晋康 1999 「中世・近世の鏡」『日本の美術』No. 394 中・近世の鏡、至文堂
- 小出義治 1977 『小栗山不動院裏山経塚群』見附市教育委員会
- 木口勝弘 1995 『新版 奥州経塚の研究』大盛堂印刷出版部
- 近藤好和 2000 『中世的武器の成立と武士』吉川弘文館
- (財)いわき市教育文化事業団 1998 『上ノ原経塚』いわき市教育委員会
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『堂ヶ谷廃寺・堂ヶ谷経塚』
- 佐野美術館 2003 『草創期の日本刀—反りのルーツを探る』

佐野美術館 2009『短刀の美一鉄の焼き』

正倉院事務所 1974『正倉院の刀剣』日本経済新聞社

末永雅雄 1931「経塚出土腰刀の一形式について」『考古学雑誌』第21巻第10号、日本考古学会

須賀川市教育委員会 1982『米山寺跡 史跡岩代米山寺経塚群発掘調査報告書』

鈴木義昌・亀田修一 1988『播磨江ノ上経塚発掘調査報告書』瀬戸内考古学研究所

関 秀夫 1985『経塚』ニューサイエンス社

関 秀夫 1989『経塚-関東とその周辺』東京国立博物館

関 秀夫 1999『平安時代の埋経と写経』東京堂出版

善通寺市教育委員会文化振興室 1996『香色山山頂遺跡群調査報告書』

高慶 孝・宇野隆夫・山口欧志・久保智康・今西寿光 2005『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』上市町教育委員会

田沢金吾 1931『鞍馬寺経塚遺寶』鞍馬寺

津野 仁 2011「大刀、太刀の編年」『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館

東和町教育委員会 1979『木幡山蔵王経塚』

中野晴久 1995「9 中世陶器 [2] 常滑・瀬美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

長野県 1988『長野県史 考古資料編全1巻(4) 遺構・遺物』(社)長野県史刊行会

奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』

平田天秋 2006『珠洲焼窯跡群』珠洲市教育委員会

新潟県 1986『新潟県史 通史編1 原始・古代』

福田 誠・菊川 泉 2001『国指定史跡 永福寺跡-遺構編-』鎌倉市教育委員会

福島県喜多方市教育委員会 1999『松野千光寺経塚』

福島県考古学会中近世部会 1997「かわらけ編年の再検討-11世紀から19世紀-(その2)」『福島考古』第38号、福島県考古学会

妻沼町教育委員会・文化財調査研究会 1982『大我井経塚』

松井一明 1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究会』第25号、静岡県考古学会

松谷時太郎 1987「越後の経塚」『越後研究』第13集、新潟県人文研究会

森嶋 稔 1981「信濃の経塚資料にみる二、三の問題-埴科郡戸倉町経ヶ峯経塚資料を中心に-」『信濃』第33巻第12号、信濃史学会

安田町教育委員会 1979『横峯経塚群』

横田賢次朗・森田 毅 1978「太宰府出土の輸入陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』第4号、九州歴史資料館

吉岡康暢 1994『中世須志器の研究』吉川弘文館

表3 刀剣類出土経塚一覽表1(本欄で誤った通称)

通称名	所在地	本刀・短刀類	伴作遺物①(武器類)	伴作遺物②(その他遺物)	時期	備考
松野千光寺経塚S K 02	所在地	刀身5	無	銅剣頭蓋、土師質土師	平安時代前期(11~12世紀)	S K 01、昭和9年(昭和調査)の遺物。経塚の構造により
松野千光寺経塚S K 01	所在地	刀身4	無	地鉄片1、鍔片1、不明鉄製品1、黒漆製物、白磁器1	平安時代前期(11~12世紀)	S K 01、昭和9年(昭和調査)の遺物。経塚の構造により
東山寺3号経塚	所在地	短刀1.5、腰刀大1	鉄鏡3.0	紙本墨画法墨鏡8、銅時輪鍔頭1本、赤漆土師、銅鍔頭、白磁・貝殻片	承安(1171)年	内外容額に年号
上ノ原経塚	所在地	短刀1.1口	刀身一拵	紙本墨画法墨鏡8、銅時輪鍔頭1本、赤漆土師、銅鍔頭、白磁・貝殻片	12世紀前半	出土遺物、紙本墨の年代感から
門島1号経塚	所在地	刀身一拵	無	銅経鏡5、内外筒1、銅時輪鍔頭1、鍔1、刀身一拵、鍔	12世紀	年代は出土銅鍔頭の編年より
水尾寺経塚	所在地	腰刀2本	無	青白磁片、銅片、白磁小窓、藤10枚、軟鉄、銅片、銅皮、銅	12世紀末~13世紀初	尾張美濃・石臼跡の編年による
小栗山不願院遺跡2号経塚	所在地	刀身片1	無	鋼鍔1、胸甲口鉢1、鍔片(頭片)一拵	12世紀前半	出土遺物の編年による
小栗山不願院遺跡4号経塚	所在地	刀身3	無	鋼鍔1、胸甲口鉢1	13世紀前半	出土遺物の編年による
鎌倉2号経塚	所在地	刀身拵3口分	無	紙本墨画法文、銅鍔2、白磁合子2、白磁墨玉2、銅鍔頭大欠、五輪拵1、水金1、水金至1、ガラス玉2、漆器片、不明漆器片等	平安時代末期(鎌倉時代初期)	出土遺物と同行による 1号拵よりはやや時代が下る
豊ヶ谷1号経塚	所在地	銅鍔水刀1、短刀63	鉄鏡7	銅経鏡1、内外筒2、皮地輪鍔3、銅鍔頭2、銅鍔頭1、銅鍔頭2、不明鉄製品2、水金至1	12世紀後半	出土遺物の年代感から
豊ヶ谷2号経塚	所在地	短刀1.7	鉄鏡1	白磁2、青磁器、毛漆器1、鍔打1	13世紀後半	出土遺物の年代感から
豊ヶ谷3号経塚	所在地	短刀2	無	経鏡2、銅鍔1、青白磁合子1、鍔打1	12世紀後半	出土遺物の年代感から

表4 刀剣類出土経塚一覽表2

通称名	所在地	本刀・短刀類	伴作遺物①(武器類)	伴作遺物②(その他遺物)	時期	備考
松野千光寺経塚S K 1	所在地	刀身拵5.3(保存せず)	鉄鏡1	銅経鏡3、石籠1、鍔6、銅鍔1、五輪拵2、地鉄片1	大治5(1130)年	石籠に年号
松野千光寺経塚S K 03	所在地	刀身片1	無	紙本墨1、皮玉1	平安時代前期(11~12世紀)	S K 01、昭和9年(昭和調査)の遺物。経塚の構造により
東山寺1号経塚	所在地	短刀1(複製)	鉄鏡2	紙本墨1、皮玉1	平安時代	
東山寺2号経塚	所在地	短刀1	鉄鏡2	鍔1、鍔片一拵	平安時代前期	出土遺物の編年による
天王寺経塚	所在地	短刀(不明)	無	内外筒1、鍔3、仏仏、紙本墨	平安時代前期	内外容額に年号
木曜山蔵王4号経塚	所在地	短刀の破片1	無	石製不明破片	12世紀後半以前	周辺の経塚の年代と同時期と考へられる
木曜山蔵王5号経塚	所在地	刀身1	無	宮澤三郎墨鏡片3、胸甲鍔片1	12世紀後半以前	時期は出土遺物の編年による
内ノ3号経塚	所在地	刀身片2	無	土師鍔片(個人?)	12世紀末	時期は行宮の経塚の出土遺物の編年による
墨石山経塚	所在地	刀身	無	鍔口、鍔片	平安時代	
熊野神社経塚	所在地	刀身1	無	銅経鏡1、胸甲鍔1	平安時代	
熊野神社経塚	所在地	刀身7(1.5口分?)	鉄鏡3	紙本墨片、銅経鏡1	平安時代	
東城寺経塚	所在地	刀身4.2.5片(保存せず)	無	紙本墨(天治?)、銅経鏡(保元?)、銅経鏡(天治?)、銅鍔片4、銅経鏡2、胸鏡1、銅鍔10、銅鍔尾2、胸小窓6、胸小窓3、銅花冠1、胸三角、胸三角、黄色ガラスの小玉2	保元3(1122)年、天治元(1124)年	紙本墨上、銅経鏡片一つは瓦法による。もう一つの銅経鏡は保元3の年号あり

研究紀要 第24号

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 平成 28 年 3 月 29 日発行

印刷 下野印刷株式会社
